



一般社団法人

日本人間関係学会ニュース 第111号 発行日: 2026.8.11

News No.111 Japan Association of Human Relations August 11, 2026

発行: 日本人間関係学会 広報委員会 E-mail: tanikawa@kusw.ac.jp 関西福祉大学 谷川和昭研究室

事務局: 〒799-2496 愛媛県松山市北条660 聖カタリナ大学人間健康福祉学部 釜野研究室

E-mail: jahrijimukyoku@gmail.com URL: https://jahhr.jp/

[内容] ☆巻頭言 ☆全国大会 ☆シリーズ「ともに老いゆく」(その3) ☆北から、南から ☆理事会報告 ☆事務局だより

《巻頭言》

未来に繋ぐ人間関係—人間関係士の果たすべき役割とは—

日本人間関係学会第34回全国大会 大会委員長 杉本 太平
(宇都宮共和大学教授)



本学会の第34回大会を栃木県宇都宮市にあります、宇都宮共和大学(シティキャンパス)で開催することとなりました。今回の大会テーマは「未来に繋ぐ人間関係～人間

関係士の果たすべき役割とは～」です。

2026年3月末に『人間関係士』ガイドブック』発刊が叶い、本学会認定資格の「人間関係士」が本格的に実施されることとなりました。一般社団法人日本人間関係学会は、教育・研究・心理臨床・福祉・医療などの研究職・専門職者のみならず、地域社会で対人支援を実践される方や一般企業で務める社会人、海外ボランティアの支援などに従事される方が集い、共に人間関係を学びあう場として設立されました。「人間関係」を共通のテーマに、共に学びあえる研究・研修・実践の場を創造していく過程で、その成果を共有できるものとして、「人間関係士」資格が世に生み出されました。本資格をその先の未来にどう繋げていくべきか、今大会では会員の皆様と共に考え、語り合える場にできればと願っております。

基調講演は早坂三郎理事長より「人間関係士に

期待されること」としてご講話を頂き、杉本より資格養成の将来構想についてお伝えします。また、大会企画シンポジウムでは、ガイドブック執筆者数名にそれぞれの領域(心理・福祉・教育)での人間関係士が果たすべき役割についてお話いただき、参加者との意見交換の機会にもしたいと考えております。研究発表につきましては、研究発表・口頭実践発表を設定し、発表15分、質疑応答5分の計20分の時間を予定しております。また、自主ラウンドテーブルやワークショップ・自主シンポジウムなども可能です。詳細は、HP掲載の「日本人間関係学会 第34回全国大会プログラム」等にてご確認いただければと思います。

世界的な自然環境の変化の中にあって、国際情勢的にも日本国内の社会状況においても、またAI化が進む変革の社会において、今こそ自分自身も他者も物も大事にされる平和で豊かな人間関係を創造していくための「変革」が強く求められているといえます。身近な生活の場から「人間関係」をより良く豊かにしていくための支援者としての「人間関係士」を本学会として社会に提供していくことで、より良い変革に向け、寄与できれば幸いです。

日本人間関係学会 第34回全国大会

未来に繋ぐ人間関係 ～人間関係士の果たすべき役割とは～



大会委員長 宇都宮共和大学 杉本太平

大会プログラム詳細

9月18日(金)

エクスカーション

9月19日(土)

9:30～17:00

開会式

基調講演

(※資格講座必修に振替え可)

大会企画シンポジウム

(※資格講座必修に振替え可)

自主ラウンドテーブル(予定)

総会(30～40分)

情報交換会

9月20日(日)

8:30～16:00

口頭発表

実行委員会企画

(※資格講座選択振替え可)

自主ワークショップ・シンポジウム

(※上級資格認定者企画については、
資格講座選択振替え可)

表彰・閉会式(次回大会長の挨拶)



主催／お問合せ先

JAHR 日本人間関係学会
Japan Association of Human Relations
(日本学術会議協力学術研究団体)

宇都宮共和大学子ども生活学部杉本研究室
sugimoto@kyowa-u.ac.jp

人間関係士 資格更新・振替ガイド

大会参加を通じて、資格更新に必要な単位を取得・振替が可能です。

必修

9月19日(土) 対象プログラム

基調講演

大会企画シンポジウム

選択

9月20日(日) 対象プログラム

実行委員会企画

自主ワークショップ・シンポジウム

※上級資格認定者企画のみ対象

専門性の向上と、未来の人間関係を築くためのピースを共に繋ぎましょう。

日本人間関係学会
第34回全国大会

未来に繋ぐ人間関係
～人間関係士の果たすべき役割とは～

日時: 2026年9月18日(金)・19日(土)・20日(日)
場所: 宇都宮共和大学シティキャンパス

第34回全国大会

会期：2026年9月18日（金）・19日（土）・20日（日）

※詳細はプログラム案をご確認ください。内容は変更になる場合があります。

会場案内

◆ 9月18日（金）エクスカーション

日光東照宮（社務所前集合）

◆ 9月19日（土）情報交換会

ホテルニューイタヤ

◆ 9月19日（土）・20日（日）大会本体

大会会場（504講義室ほか） ※詳細は別途ご案内

日別プログラム

9月18日（金）

エクスカーション

13:20 日光東照宮 社務所前 集合

所要時間：約1時間30分～2時間

9月19日（土）

受付開始・開会式

9:30 受付開始

10:00～10:25 開会式

総司会：森千佐子 大会副委員長

大会委員長挨拶：杉本太平 / 理事長挨拶：早坂三郎

基調講演

10:25～10:55

早坂三郎

「人間関係士の将来構想」

※資格講座必修単位に振替可

講話

11:00～12:00

杉本太平

「人間関係士」資格認定の現状と課題

大会企画シンポジウム

13:20～14:30

話題提供者：田中・藤川・目黒・森・永野・三好 各氏（調整中）

※資格講座必修単位に振替可

自主ラウンドテーブル

14:40～15:40

加藤誠之・大住誠・目黒達哉・新井千香・清谷典生

「瞑想箱庭療法の実践」

総会・情報交換会

15:50～ 総会

17:00～ 情報交換会

会場：ホテルニューイタヤ

9月20日（日）

口頭発表・実践発表

8:30 受付開始

9:00～11:30

口頭発表・実践発表

12:00 学会賞発表

大会企画ワークショップ・閉会式

13:00～14:30

杉本太平・白石京子

「人間関係士のためのHRSTの実践

一行為法（心理劇）による人間関係力の育成」

14:45～ 閉会式・次回大会長挨拶

補足・ご案内

- ▶ **資格講座**：基調講演・シンポジウム・ワークショップは「人間関係士」資格講座の単位に振替可能です（詳細は当日案内）。
- ▶ **昼食**：9月19日・20日は昼食時間帯に昼食休憩を設定。詳細は別途プログラムをご確認ください。
- ▶ **参加費・申込**：参加費・申込方法等の詳細は、別途配付の参加案内またはプログラム冊子をご確認ください。
- ▶ **プログラム変更**：本プログラムは案の段階です。変更が生じた場合は学会よりご連絡します。

主 催：日本人間関係学会 第34回全国大会実行委員会（大会委員長：杉本太平）

備 考：本資料はプログラム案です。参加費・申込方法等は別途案内をご参照ください。

シリーズ「ともに老いゆく」（その3）

ごちゃまぜのぬくもりが生む、地域のしなやかなレジリエンス

シリーズ「ともに老いゆく」の第3回をお届けします。その核心は「支援する側／される側」という固定化を壊し、高齢者が子どもを見守り、若者が夕食を手伝い、誰もが主役になれる瞬間が日常的に生まれることにあります。

【出席者】 三好 明夫 氏（日本人間関係学会副理事長／NPO法人とらい・あんぐる理事長）

石田 栄子 氏（とらい・あんぐる常勤理事／調理師・介護福祉士・社会福祉士）

谷川 和昭（日本人間関係学会理事・広報委員会委員長：司会進行）

◆紫野の民家に灯る「ごちゃまぜ」の日常

谷川（司会）「本日は、シリーズ『ともに老いゆく』の第3回。京都・紫野の『寄合処』での実践について、三好先生、石田さんから、まず、この“ごちゃまぜ”という言葉から伺いたいのですが――」

三好「制度の縦割りが進むほど、人は“対象者”として分けられてしまうんです。高齢者サロン、子ども食堂、障害者支援…どれも大切ですが、同時に“助ける側／助けられる側”という固定化も生まれてしまう。」

石田「でも、寄合処ではそれが自然にひっくり返るんです。Yoria Port/2026 Vol.2にも入れましたが（p.5）、『ここでは子どもは私がみてるから、お母さんはゆっくりご飯を食べ』と、ふさぎ込みがちだった高齢者の方が自ら立ち上がる。あの瞬間の空気は、本当にあたたかいですよ。」

谷川「役割が逆転する日常……それこそがレジリエンスですね。」

◆「居・食・充」がつくる、まあるい円（縁）

谷川「寄合処では衣食住を“居・食・充”と再定義されていると伺いました。」

三好「ええ。“居心地の良さ（居）”“食卓を囲む（食）”“心の充足（充）”。この三つが揃うと、人は自然と混ざり合うんです。」

石田「昼はワンコインランチ、午後はドーナツのカフェ、夕方は子ども食堂。夕方になると高校生や大学生がふらっと来て、宿題をする子、夕食づくりを手伝う若者、おしゃべりする高齢者が同じ空間にいるんです。」

谷川「まるで舞台の群像劇のようですね。」

三好「仕切りがないからこそ、『街の中に大きな“子ども110番の家”があるような安心感』が生まれるんです。」

◆科学が証明する「つながり」と「利他」の力

谷川「寄合処の実践は、科学的知見とも深くつながっていますね。」

三好「近年の疫学研究では、豊かな人間関係を持つ人は死亡率が顕著に低い。脳科学では、誰かを応援す

る利他行動がドーパミンを分泌させることも分かっています。」

石田「支援を受ける側が“誰かを助ける側”に回る瞬間、表情が変わるんです。添付原稿にもありましたが、『自分も誰かの力になれるという実感こそが、無力感を克服する最強の処方箋』なんですよ。」

谷川「寄合処は、その処方箋が日常的に手渡される場所なんですね。」

◆「介護・援助」から『応援』へ

三好「寄合処が大切にしている言葉は“応援”です。上下ではなく横並び。誰もが主役になれる。」

石田「ガラス戸に掲げた『全ての世代のご縁がまあるい円になるように』という言葉は、私たちの願いそのものです。」

谷川「“まあるい円（縁）”…本当に美しい表現ですね。」

◆新たな一歩『相談支援事業所さんちゃん』

三好「新規事業『相談支援事業所さんちゃん』を開設しました。寄合処と連携し、日常の中で住民の異変を早期に察知し、必要な支援へつなぐ仕組みを整えています。」

石田「“ちゃんと向き合い、ちゃんと考え、ちゃんと歩む”。“ちゃん”を重ねて、みんなによし。そんな事業所です。」

◆小さくても、しなやかな一歩を

谷川「共生社会に正解はありません。でも、寄合処のように“混ざり合う日常”があるだけで、地域はしなやかに強くなる。」

三好「難しく考えなくていいんです。若い世代の思いを取り入れながら“ゆるっと話す”だけで、もう一歩踏み出している。」

石田「その一歩が、まあるい円を少しずつ広げていくんですよ。」

谷川「本日の懇談は、地域の未来を照らす灯りのようでした。ともに老いゆく社会を、これからも皆さんと紡いでいきたいと思います。」

ともに老いゆく Yoriai Port

2026
VOL/02



特定非営利活動法人
とらい・あぐる『寄合処』

理事長 三好 明夫
発行者 石田 栄子

「ごちゃまぜ」の温もりから生まれる、地域のしなやかなレジリエンス

～「支援の受給者」から「生活の主役」へ：多世代共生拠点『寄合処』の目指す未来像～

制度の縦割りや対象別の居場所づくり（高齢者サロン・子ども食堂等）は、時に「ケアする側」と「される側」の固定化を生み出します。京都市北区・大徳寺すぐ近くの民家で実践する『寄合処』は、あらゆる世代が「ごちゃまぜ」に存在する日常を通じて、課題解決の場を超えた「関係性づくりの場」を構築しています。日常の混ざり合いがもたらす地域社会のレジリエンス（回復力・しなやかさ）と今後の居場所のあり方を考察します。

1. 制度の縦割りと「分けられた居場所」

への問い

私たちが「地域共生社会」という言葉を聞くとき、どこか教科書に書かれた理想論のように感じてしまっていないでしょうか。現代の福祉政策は、高齢者福祉、児童福祉、障がい者福祉といったように制度ごとに「縦割り」に分断されてきました。その結果、地域の中でも「高齢者サロン」や「子ども食堂」のように対象ごとに場所を分けて支援を行う形が定着しています。

しかし、本来の私たちの暮らしや地域生活は、制度のように分類できるものではありません。対象ごとに居場所を分けることは、効率的なサービスを可能にする一方で、「助ける側の支援者」と「助けられる側の当事者」という固定化された上下関係を生み出すリスク、も合わせ持っています。

2. 「関係性づくりの場」としての拠点

京都市北区紫野・大徳寺のすぐ近くに位置する民家。その小さな拠点『寄合処』で私たちが試みているのは、単に困りごとに対応する「課題解決の窓口」を作ることではありません。私たちが真に必要なとしているのは、「ただ、ここにいていいんだ」と誰もが実感できる「関係性づくりの場」です。

自宅でふさぎ込みがちだった高齢者の方が、寄合処を訪れる若い母親や小さな子どもたちを見て、「ここでは子どもは私がみてるから、お母さんはゆっくりご飯を食べ」と自ら立ち上がり、子どもの見守りを始めることでどんどん元気を取り戻していく……。ここでは、「ケアする側」と「される側」がくると逆転する瞬間が日常的に生まれています。

3. 日常を育む暮らしの『居・食・充』

私たちは活動の根幹として、従来の『衣食住』を「居・食・充（い・しょく・じゅう）」という独自の概念に置き換えて捉えています。ただ、物理的な場所や食料を提供するのではなく、「居心地の良さ（居）」と「心の充足（充）」を食卓を通して多世代で育む取り組みです。

【昼】 ランチ	日替わり10食限定の「ワンコイン（500円）」地域住民が気兼ねなく集い、共にテーブルを囲む食の場。
【午後】 カフェ	A型就労支援事業所で製造された「豆乳おからドーナツ」を提供。フードロス削減にも寄与。
【夕方】 子ども 地域食堂	子ども（中学生以下）100円・保護者300円・大人500円。 「よそ」の食卓で多世代と食事をすることで、家庭では食べない野菜や苦手な献立を間食したり、自発的な片付けの芽生えが生まれています。

■「仕切りのなさ」が生み出すシームレスなセーフティーネット

宿題をする子、夕食づくりを手伝う若者、おしゃべりを楽しむ高齢者。夕方になると地元の高校生や大学生も自然と集まってきます。この空間の仕切りのなさは、街の中に大きな「こども110番の家」が存在するような安心感を生んでいます。さらに多様な専門職がごちゃまぜに関わっているため、身構えて福祉窓口へ「相談に行く」のではなく、ただ「ほっとしに来た」結果として、自然に必要な支援につながるシームレスな仕組みを構築しています。

科学的知見からひも解く「利他」と今後の居場所の展望

～ 介護・支援を超えた『応援』の精神と「まあるい円（縁）」が描く地域社会 ～

4. 科学・脳科学が証明する「つながり」と「利他」のちから

私たちが目指す「ごちゃまぜの居場所」は、単なる精神論やさしいことではありません。近年の疫学調査や社会福祉の研究では、年代を問わず「豊かな人間関係を維持している人は、死亡率が顕著に低い」という驚きうべき事実が実証されています。人間関係の有無は気分の問題にとどまらず、私たちの「命そのもの（生存率）」に直結しているのです。

また、脳科学の知見によれば、他者をサポートしたり応援したりする「利他行動」をとるとき、たとえばそれが自己満足であったとしても、脳の報酬系プロセスが作動し、快楽物質である「ドーパミン」が分泌されます。誰かを応援することは相手のためであると同時に、巡り巡って自分自身のウェルビーイング（幸福度）を高める脳科学的な循環構造を持っています。

■ 無力感を克服する「助ける側」への復帰

大きな困難や生活のストレスを抱える人は、一般に「福祉サービスの対象者」と固定化されがちです。しかし被災地や福祉現場の調査では、サポートを受ける側が、「誰かを助ける側」に回った瞬間に、人生を切り開く主体性が大きく引き出せることが、分かっています。「自分も誰かの力になれる」という実感こそが、どうしてもない無力感を克服する最強の処方箋となります。

5. 「介護・介助・援助・支援」から『応援』への発想の展開

従来の福祉現場では当たり前のように「介護・介助・援助・支援」という言葉が用いられてきました。しかし『寄合処』では、これらの概念をあえて再考し、関わりの根幹に『応援』の二文字を提示します。

誰かを「お世話が必要な弱い存在」と捉えるのではなく、誰もが自身の人生を切り開く「かけがえのない主役」であると信じること。上下の関係ではなく、同じ目線に立つ横並びのパートナーとして、一人の等身大の人間が自分の足で一歩を踏み出す姿に皆でエールを送り合う。これこそが寄合処が目指す「多世代応援社会」の真髄です。

6. 今後の居場所のあり方について考察

今後、超高齢社会と単身世帯の増加が加速する中で、地域社会に求められるのは、福祉施設の増設ではありません。日常の中に「お互いさま」と言い合える網の目のような温かな関係性を着実に張り巡らせておくこと。

寄合処のガラス戸に掲げられた「全ての世代のご縁がまあるい円になるように」という思い、そして理事長が掲げる「三方よし」の精神のもと、かつていい大人が若い世代を応援し、誰もが弱い自分を出せる、弱音を吐けるそんな「サードプレイス」を地域とともに紡ぎ出していきます。

news 『相談支援事業所さんちゃん』の開設

『ちゃんと向き合い、ちゃんと考え、ちゃんと歩む』
『“ちゃん”を重ねて、みんなによし』

本事業の展開にあたり、新規事業「相談支援事業所さんちゃん」を開設いたします。本事業所を地域共生型サロン・地域食堂と有機的に連携させることで、居場所づくり・食支援にとどまらず、住民の生活課題や異変を早期に発見し、適切な支援へと繋げる包括的なセーフティネットの確立を目指します。

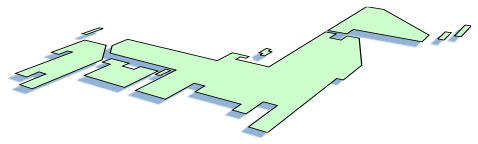
年齢や属性を問わず誰もが日常的に立ち寄れる居場所をつくり、お互いが自然に関わり合う中で「助け合いの循環」と互助意識の向上を図ります。さらに、福祉専門職によるさりげない見守りや生活相談体制を組み込むことで、参加者の異変や地域課題を早期に察知し、必要な専門支援へスムーズにつなぐ仕組みを構築します。

まとめ：明日から地域でふみだす「小さくてもしなやかな一歩」

共生社会の形に、正解は一つありません。特別なイベントだけでなく、日常の中での自然な「混ざり合い」の中にこそ、真のセーフティネットが存在するのではないのでしょうか。「明日から地域で何ができるだろう？」と難しく考える必要はありません。これから生きる若い世代の思いを取り入れながら「ゆるっと話し合う機会」を持つこと自体が、すでに大きな第一歩だと感じています。その大切な機会が来週に控えており、今からとてもワクワクしています！

北から、南から

今日もまた一つ一つ 何かが変わり始めている…



「御池ブルー」心の散歩

佐々木かなこ(大学非常勤講師)

京都の中心部を東西に走る御池通は、京都市役所の正面にもあたるが、烏丸通と河原町通を走る通りである。その歩道の一部に「御池ブルー」と呼ばれる鮮やかな紫陽花が咲き誇っている。通りの北側が青一色の紫陽花で、南側は白一色である。



この紫陽花が「御池ブルー」と呼ばれるようになったのは最近である。この境界は、ビジネス街でもあり、ホテルやマンションも立ち並び、どこかオシャレ感がある。街路樹の根元に、四季折々の花をあしらう花壇がある。「四季の花ストリート事業・御池通スポンサー花壇」として、近隣の企業や医院、商店などが資金を出し合い、花壇を作り、その手入れも行き届いている。「御池ブルー」も梅雨の季節の花として一役を担っている。ニュースで紹介されたこともあり、写真を撮る人が増えたように思う。

京都と言えば、平安京の都、歴史の街として有名である。しかし、常に新しい息吹を感じさせる一面もある。年間を通して観光客は絶えないが、ここ数年は「押し寄せてくる荒波」にも似た様相にあり、様々な問題を引き起こしている。行き交う人々の言葉がほぼ外国語である。ニューヨークにいるのかと錯覚さえ覚える。日本人は大声で話をしないが、通りを歩く外国人はスポーツ観戦のボリュームで話す。

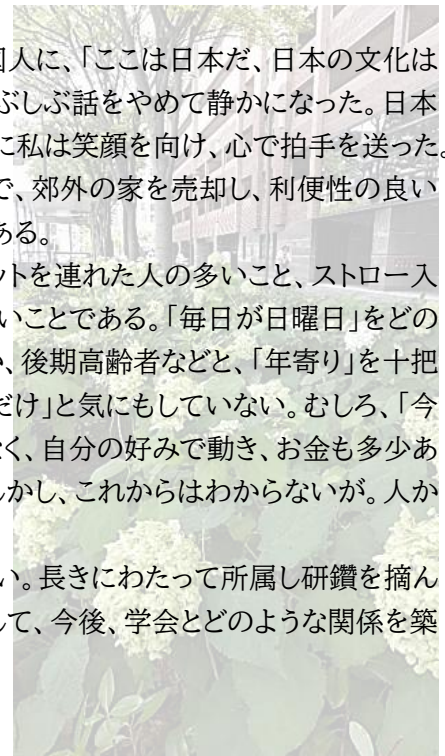
先日、面白い光景に遭遇した。電車の中で、外国人が他の外国人に、「ここは日本だ、日本の文化は静かだ、日本のルールを守れ」と言っていた。注意された人は、しぶしぶ話をやめて静かになった。日本の文化を語り、日本を味わいたい人もいる。不快さを諭す外国人に私は笑顔向け、心で拍手を送った。

また、時代とともに街も変容していく。京都も高齢化が進む中で、郊外の家を売却し、利便性の良い都心のマンションに引っ越しをしてくる層もいる。私もその一人である。

街路樹のベンチに座り、行き交う人々を眺めるのも楽しい。ペットを連れた人の多いこと、ストロー入りの飲み物を片手にする人も同じ。最も気になるのは老人層が多いことである。「毎日が日曜日」をどのように暮らしているのか聞いてみたい。これまでも団塊の世代とか、後期高齢者などと、「年寄り」を十把一絡げにした呼び方をされてきた。当の本人は「ただ数字が多いだけ」と気にもしていない。むしろ、「今が一番いい」とさえ思っている。あくせくと時間に追われることもなく、自分の好みで動き、お金も多少ある。何より月日をかけて経験してきた思考と分別の自信がある。しかし、これからはわからないが、人から見たら違和感があるかもしれないが、自分では不満がない。

日本人関係学会では、「終身会員」の制度が整えられたらいい。長きにわたって所属し研鑽を摘んできた仲間をいたわろうとする配慮に感謝したい。該当する身として、今後、学会とどのような関係を築いていくべきか、貢献できることはあるかを考えていきたい。

「御池ブルー」は安らぎと潤いの色だと思う。



人間関係士の必要性

白石京子((日本医科学大学校/親子心理教育研究所/人間関係・HRST研究会)

現代社会は、対立の先鋭化、孤立の進行、価値観の多様化などにより、人と人との関係が不安定になりやすく、殺伐とした空気が広がりやすい。家庭、学校、職場、地域のいずれにおいても、対話の断絶や誤解が生じやすく、関係の不調がそのまま支援の停滞や不適応につながる場面が増えている。こうした社会状況の中で、人と人が安心して向き合い、かかわりながら学び合う場をつくる役割を担う人間関係士の必要性は高まっている。

人間関係士は、人と人とのやり取りの特徴や、関係がうまくいかなくなる場面を丁寧に見立て、対話の流れを整え、関係の再構築を支える専門職である。保育・教育・医療・福祉などの対人援助領域では、相談者の不安、家族間の葛藤、保護者と学校の行き違い、医療方針をめぐる意見の不一致など、関係の質が支援の成否を左右する場面が多い。人間関係士は、こうした関係の揺らぎを丁寧に観察し、安心して話し合える場をつくり、協働を促す役割を担う。

制度面でも、人間関係士の役割は重要である。家族法改正、虐待防止体制の強化、就学支援の充実など、制度が「関係の調整」を前提とする方向へ進んでいる。制度が整備されても、現場では父母間の対立、保護者と学校の不信、専門職同士の価値観の違いなど、関係の問題が支援の妨げとなることが少なくない。制度と現場の間をつなぎ、関係の調整を専門的に支える人材が不可欠である。

また、子どもの権利保障の観点からも、人間関係士の役割は大きい。子どもは大人の関係の影響を強く受ける存在であり、家庭内の葛藤や学校での不適応がある場合、子どもの声がかき消されやすい。人間関係士は、子どもの気持ちや意向を丁寧に聴き取り、必要な場で代わって伝え、子どもが「大人は自分を守ってくれる」と信頼できる関係を支える役割を担う。これは、子どもの安心と成長を守るうえで欠かせない視点である。

さらに、人間関係士は、領域を超えて人が集い、かかわりながら学ぶ機会をつくる役割を持つ。保育者、教員、医療職、福祉職、行政職、そして学生や一般の方が同じ場に集い、関係の理解を深めることは、社会全体の関係力を高める基盤となる。こうした学びの場は、専門職だけでなく、広く社会に開かれ、誰もが参加できるものである。

そして、人間関係士の根底には、人は生涯発達し続ける可塑性をもつという確かな前提がある。関係は固定されたものではなく、人もまた変わり続ける存在である。だからこそ、対話を通じて関係は新しくなり、支援は未来へ向けて開かれていく。

以上のように、人間関係士は、殺伐とした社会の中で、人がかかわりながら学び、支え合う社会をつくるために不可欠な専門職である。領域横断の学びと協働を促し、学生や一般の方にも広く知ってもらうことで、関係の力を社会全体に広げていくことが期待される。人との関係性の可能性を創造する力を、私たちは信じ続けたい。

令和7(2025)年度 第5回 日本人間関係学会理事会議事録

日時：令和7(2025)年12月13日(土) 10時30分～11時40分

方法：Zoomによるオンライン会議

出席者：伊賀、占部、大石、加藤、佐々木、佐藤、杉本、鈴木、田中(康)、谷川(和)、早坂、三好、目黒、森、山崎の15名、および4名の理事からの委任状（理事長一任）を受領し、計19名の出席により理事会は成立した。（敬称略・50音順）

・理事長挨拶：全国大会開催協力への御礼が述べられ、重ねて資格・人間関係士のための「ガイドブック」作成に向けての協力要請があった。

【協議事項】

1. 第33回全国大会報告：山崎大会委員長より、全国大会が関係者の協力と多くの出席者のご参加のもと盛会裏に催行され、その概要は学会HPに「報告」として掲載された旨、報告があった。

2. 全国大会での口頭発表表彰と対応事案について：書面による臨時理事会の審議経過を受けての「優秀賞」授与についての公表を含めた措置について審議され、異議なく承認された。また、対応事案の措置について早坂理事長の説明後に審議され、理事長一任による措置が審議の結果、異議なく承認された。併せて、今後の表彰者選考方法も再確認の上、異議なく承認された。

3. 人間関係士資格制度及びガイドブックについて：杉本資格委員会委員長から資格「人間関係士」養成用の「ガイドブック」の編集状況についての報告があり、また第3回理事会で諮問を受けたガイドブック発刊の「発注数と見積り」については資格委員会の決定に一任することが審議の結果、異議なく承認された。

4. 令和6(2024)年度決算報告及び令和7(2025)年度予算案について：鈴木事務局長から全国大会時での報告及び予算案についての補足説明があり、全国大会時に承認された内容にて監事監査を進めることが審議の結果、異議なく承認された。

5. 各種委員会委員の交替対応について：釜野編集委員会委員長からの同委員会委員長交代の要請を受けての同委員会での検討の結果、目黒理事が推薦され、ご本人の承諾を得たことを受けての審議の結果、異議なく承認された。

6. 編集委員会委員及び学会誌投稿規程等の修正について：目黒理事が編集委員会委員長となり、併せて同委員会委員の構成についての早坂理事長の報告を受けての目黒委員長から投稿規定改定案の説明があり、同委員会による「投稿規程」等についての改定案が審議の結果、異議なく承認され、学会HP並びに第30号の学会誌巻末への掲載についても審議の結果、異議なく承認された。

7. 理事長改選方法及び法人管理について：早坂理事長より令和8(2026)年度初めの理事会において理事長改選方法とその時期についての提案の提供依頼が全理事に求められた。また、これに関連する法人運営の手続きについて依頼した司法書士と進めていく上で、総会開催時期と全国大会での総会との整合性のための手続きの必要性の説明が早坂理事長から説明があり、共通認識が得られた。

8. 会員の入・退会について：鈴木事務局長から報告事項のないことが報告された。

9. 次回理事会開催予定日時について：年明けの1月か2月の土曜日の午前中に開催したい旨の案が述べられ、特に意見はなかった。

10. その他：特にないことが確認された。

【報告事項】

1. その他：特にないことの確認を以て、今回の理事会を終了した。

令和7(2025)年度 第6回 日本人間関係学会理事会議事録

令和7(2025)年度日本人間関係学会第6回理事会議事録

日時：令和8(2026)年2月28日(土) 10時30分～12時00分

方法：Zoomによるオンライン会議

出席者：伊賀、占部、佐藤、杉本、鈴木、田中(典)、谷川(和)、永野、早坂、目黒、森の11名、および6名の理事からの委任状（理事長一任）を受領し、計17名の出席により理事会は成立した。（敬称略・50音順）

・理事長挨拶：認定資格「人間関係士」養成のための「ガイドブック」の作成に向けて最終的な協力要請があり、また次回全国大会への期待が述べられた。

【協議事項】

1. 「ガイドブック」の編集と発刊について：杉本資格委員会委員長から資格「人間関係士」養成用の「ガイドブック」の最終的な編集状況と発刊後の予定、また「発注数・見積金額」についての説明があり、審議の結果、異議なく承認された。

2. 第34回全国大会について：宇都宮共和大学にて開催予定の第34回全国大会について杉本大会委員長より、日程・大会テーマ及び概要が説明され、審議の結果、異議なく承認された。

3. 学会誌発刊・送付報告及び査読システムの改善案について：目黒編集委員会委員長より学会

誌の発刊及び送付等の説明、そして投稿等についての規程の改定、また特に査読システム変更点についての追加案が説明され、審議の結果、異議なく承認された。

4. 令和6(2024)年度決算報告及び令和7(2025)年度予算案について：鈴木事務局長から全国大会時での両案についての前回理事会後の説明補足があり、審議の結果、異議なく承認された。

5. 法人手続き及び理事長・理事改選について：早坂理事長より令和8(2026)年度での理事長・理事改選についての提案がなされてきたが、法人としての定款上の総会開催時期と全国大会での総会開催時期との整合性を図るための調整案についての説明があり、更に継続して検討・審議を加えることとした。

6. 年会費の高齢会員への配慮対応について：理事長から本学会でも高齢会員への配慮制度を設けるべき時期に来ているのではないかとの提案に、審議の結果、異議なく承認が得られたので、他学会の制度の収集に着手し、成案を得た上で理事会及び総会に諮ることとした。

7. 学会ニュースについて：谷川(和)理事から2月度の学会HPへの「学会ニュース第110号」の掲載について説明があり、併せて今後の原稿募集の依頼があった。

8. 会員の入・退会について：鈴木事務局長から報告事項がない旨の報告があった。

9. 理事退任について：加藤誠之理事から令和8年2月27日付を以て理事退任の連絡があった旨の報告が早坂理事長から述べられ、審議の結果、異議なく承認された。

10. 次回理事会開催予定日時について：年度初めに開催したい旨の案が述べられ、特に意見はなかった。

11. その他：特になんことが確認された。

【報告事項】

1. 関西・東海地区会開催報告：令和7年12月に開催された第84回目の地区会で、三好会員と早坂会員による研究発表がされたことが報告された。

2. その他：特になんことの確認を以て、今回の理事会を終了した。

令和8(2026)年度 第1回 日本人間関係学会理事会議事録

日時：令和8(2026)年4月29日(水・祝) 13時00分～14時30分

方法：Zoomによるオンライン会議

出席者：占部、佐々木、佐藤、杉本、鈴木、田中(典)、早坂、目黒、山崎の9名と丸谷監事、および8名の理事からの委任状（理事長一任）を受領し、計17名の出席により理事会は成立した。（敬称略・50音順）

・理事長挨拶：認定資格「人間関係士」養成のための「ガイドブック」の発刊に際しての協力へのお礼が述べられ、また次回全国大会への協力依頼があった。

【協議事項】

1. 「ガイドブック」の発刊及びその後の計画について：杉本資格委員会委員長から資格「人間関係士」養成のための「ガイドブック」の発刊後の計画及び研修等の諸書式と手続きについての説明があり、審議の結果、異議なく承認された。

2. 第34回全国大会について：杉本大会委員長より第34回全国大会についての日程・大会テーマ及び口頭研究発表をはじめとするスケジュールが、また参加費等の具体的運営については臨時のメールによる会議に委ねたい旨が説明され、審議の結果、異議なく承認された。

3. 法人手続きと理事長・理事改選について：早坂理事長より理事長・理事改選についての提案がなされてきたが、改選等について定款上の総会開催と全国大会での総会開催との整合性を図るための調整についての説明があり、司法書士に相談の上、更に検討を加えていくことが審議の結果、異議なく承認された。

4. 研究委員会の副委員長の推薦について：早坂理事長から研究委員会副委員長に大石理事の推薦が報告され、また占部委員長の要請を受けて山崎理事が推薦され、審議の結果、異議なく両理事の副委員長就任が承認された。

5. 学会HPの「委員会」における各委員会（編集・研究・資格・研修・広報）の紹介文の修正依頼について：早坂理事長から紹介文の修正が提案され、審議の結果、異議なく承認された。

6. 「本学会における研究動向の30年史」への投稿について：早坂理事長より標題の研究論文投稿についての相談を受けていたが、投稿締め切り時期が3月末であったので、事後ながら承認について審議が求められ、異議なく承認された。

7. 会員の入・退会について：鈴木事務局長より2名の新入会員の紹介があり、早坂理事長からの入会希望者についての詳細説明の後、審議の結果、異議なく承認された。

8. 令和7(2025)年度立替金の精算について：鈴木事務局長より令和7(2025)年度の立替金の支払いの申告要請があったが、現時点及び出席者からは特に申出はなかった。

9. 学会封筒（角2・長3）発注及びロゴ挿入の件：鈴木事務局長より学会用事務封筒2種の発注について、デザインとともに説明があり、関係理事との調整のもとの発注が、審議の結果、異議なく承認された。

10. 次回理事会開催予定日時について：早坂理事長より、全国大会の進捗に応じて臨時理事会の開催及び次回理事会を5月末に開催したい旨の計画が説明され、審議の結果、異議なく承認された。

11. その他：特になんことが確認された。

【報告事項】

1. 地区会開催報告：第85回関西・東海地区会が令和8年3月に開催され、社会員と船越会員による研究発表があった旨の報告がなされた。

2. その他：特になんことの確認を以て、今回の理事会を終了した。

令和8(2026)年度 第2回 日本人間関係学会理事会議事録

日時：令和8(2026)年5月31日(日) 10時30分～11時30分

方法：Zoomによるオンライン会議

出席者：伊賀、占部、佐々木、佐藤、杉本、鈴木、田中(典)、永野、早坂、藤川、目黒、森の12名、および6名の理事からの委任状（理事長一任）を受領し、計18名の出席により理事会は成立した。
（敬称略・50音順）

・理事長挨拶：特に、第34回全国大会開催についての協力要請があった。

【協議事項】

1. 第34回全国大会について：杉本全国大会委員長より資料を介して、①今年度全国大会の申込み及びそれらの締め切り日の設定の一部延期について並びに口頭研究発表とラウンドテーブルの申込数の報告があり、会員からの協力と大会参加への催促督促が求められた。次に、②人間関係士資格申請及び講座等の計画と運営についての詳細な提案があり、審議の結果、異議なく承認されると共に講座等への企画・運営への協力が求められた。③宿泊については、特に今回の開催期間は大型連休となるため大会委員長予約のホテルへの予約申込の案内があった。また、台風や線状降水帯、そして最近顕著になっている熊の出没等からの大会スケジュールへの影響について、学会HPと事務局長からの一括メールにての案内の対応が提案され、その協力が審議の結果、異議なく承認された。④広告・協賛への協力要請が求められ、早坂理事長からの早速の協力対応が述べられた。最後に、⑤大会実行委員会メンバーの確認及び実行委員についての提案の確認があり、審議の結果、異議なく承認された。

2. 全国大会での語り旅部会・エクスカージョンの計画と内容について：佐々木委員長から9月18日に計画されているエクスカージョンの内容について、案内資料を基に詳細の説明があり、審議の結果、異議なく承認された。

3. 学会封筒（角2・長3）発注及びロゴ挿入の件：鈴木事務局長から、デザイン案が示され、審議の結果、異議なく承認された。尚、料金別納の表示について意見があり、これまでの利用についての助言のもと記載・掲載することが審議の結果、異議なく承認された。

4. 会員の入・退会について：鈴木事務局長から、この間の異動のないことが報告された。

5. 次回理事会開催予定日時について：早坂理事長から、全国大会準備への協力のため6月末の土曜日開催案が述べられ、異議はなかった。

6. その他：学会賞及び優秀賞等の名称と内容及び対象者についての確認が求められ、理事長及び関係者の意見集約した規程案の提示が、更にはそれらの選考方法の提示を含めた内容が早坂理事長から説明され、審議の結果、異議なく承認された。他には、特にないことが確認された。

【報告事項】

1. 地区会開催報告：第86回関西・東海地区会が令和8年6月6日に開催されることの報告があった。
2. その他：特にないことの確認を以て、今回の理事会を終了した。

令和8(2026)年度 第3回 日本人間関係学会理事会議事録

日時：令和8(2026)年6月27日(土) 10時30分～11時40分

方法：Zoomによるオンライン会議

出席者：伊賀、占部、大石、佐々木、佐藤、杉本、鈴木、田中(典)、田中(康)、谷川(和)、永野、早坂、藤川、三好の14名、および4名の理事からの委任状（理事長一任）を受領し、計18名の出席により理事会は成立した。（敬称略・50音順）

・理事長挨拶：全理事一丸となつての全国大会の開催と人間関係資格活動の展開について協力が求められた。

【協議事項】

1. 理事長選出及び臨時総会開催と法人登記申請について：早坂理事長から令和7(2025)年度全国大会総会での審議を経て理事長登記申請へ向けての理事の意見表明を受け、理事長及び副理事長並びに理事の重任についての慎重審議の結果、異議なく全員一致で同案の承認が決議された。ま

た、理事会終了後にメールでの一括送信による全会員による「臨時総会」開催について審議も異議なく承認され、本理事会後に鈴木事務局長から全会員に一括送信することとした。

2. 第34回全国大会について：杉本全国大会委員長から口頭発表申込数が13名に及んでいること。また、大会参加者数並びに宿泊・情報交換会参加申込等の申込みが少ないので理事各位を含めての申込み手続を今月中にお願いしたいこと、更にはラウンドテーブルやワークショップ企画の検討と申込みへの依頼が述べられた。尚、「プログラム・発表要旨集」の理事による最終校正を8月上旬に依頼し、その後の手続を経て全会員に送付したいとの計画が述べられた。併せて、広告・協賛への応募状況の報告と謝意が述べられた。

3. 各種規定等の案について：早坂理事長から本理事会開催前に資料の送信された「高齢者への学会年会費の無償化」について、「終身」との名称変更への意見があり、その採択と共に規定は審議の結果、異議なく承認された。次に、送付資料で提案されていた口頭発表の「優秀賞」選考方法に関する規程について審議され、異議なく承認された。

4. 入退会について：鈴木事務局長から藤川理事推薦の4名の希望者及び推薦者がいない準会員希望者については理事長と事務局長が面談した業績及び入会動機の確認に基づく内容が報告され、計5人の入会が審議の結果、異議なく承認された。

5. 次年度の全国大会について：早坂理事長から自薦・他薦で来年度の全国大会開催会場候補についての依頼が述べられ、三好理事から所属大学にての開催の申出があり、大学内での調整を進めて頂くことが、審議の結果、異議なく承認された。

6. 次回理事会開催予定日時について：早坂理事長から、全国大会開催前の理事会開催の日程案が示され、調整の結果8月22日(日)午後5時から開催とすることを決した。

7. その他：

①谷川(和)広報委員長から次回「学会ニュース」掲載への投稿が依頼された。

②占部理事から変革期の社会にあつての研究及び学会活動への本学会の役割についての検討の機会を設けていくことへの期待が述べられた。これに対し、資格養成機会の企画や社会貢献活動の多様化などの具体的な企画の表明があった。今後の検討審議の継続が承認された。

その他、特にないことが確認された。

【報告事項】

1. その他：特にないことの確認を以て、終了した。

以上

事務局だより

【会員動向】（2026年4月1日～2026年7月31日）

2026年7月31日現在

会員146名（正会員：118名 一般会員：11名 準会員17名 賛助会員0）

〈入会者〉

正会員：9名 伊藤華野・河合高鋭・松本圭朗・渡辺朗生・磯野洋一・早川典子・吉田宗範・ 林真紀・星野谷優子

準会員：1名 平塚弥生

（敬称略）

7月28日の地震の速報に、驚きと戸惑いを隠すことができませんでした。令和8年熊本地震で被災された皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。大きな余震が続き、暑さのなか、避難をされている方も多いことと存じます。皆さまとご家族の安全と被災地の一日も早い復旧・復興を心よりお祈り申し上げます。

また、被災地における救命・救助活動や支援活動に尽力されております方々に対し、深く敬意を表するとともに、本学会としまでも、復旧・復興に向けて可能な支援に努めたいと存じます。

今年の第34回全国大会は、9月18日・19日の両日、栃木県宇都宮市にございます、宇都宮共和大学シティキャンパスにて開催されます。大会テーマは、「未来に繋ぐ人間関係～人間関係士の果たすべき役割とは～」です。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。引き続き、皆さまのご高配を賜りたく存じます。何卒、よろしくお願い致します。

（日本人間関係学会 事務局 鈴木満）

学会ニュースは年2回発行（2月・8月）

「北から、南から」のコーナーでは、会員からの投稿をお待ちしております。
お寄せいただきたいのは、**A4用紙・半枚から1枚**。多少オーバーしても大丈夫。

日々の生活で感じたことや、思い浮かんだこと、作品などお便りに載せてください。

1月末までの投稿分は2月発行のニュースに掲載されます

7月末までの投稿分は8月発行のニュースに掲載されます

送付先 広報委員会（谷川）まで tanikawa@kusw.ac.jp

（編集後記）

令和8年熊本地震で被災された皆さまに、心よりお見舞い申し上げます。本号を編集しながら、会員の皆さまがそれぞれの地域で人間関係を支え続けている姿を思い浮かべていました。今回の大会テーマ「未来につながる人間関係」は、まさに皆さまの日々の実践と響き合う言葉だと感じています。宇都宮共和大学での全国大会で、皆様と未来への可能性を語り合えることを楽しみにしております。

（谷川）